

教室で読まれる『こころ』

——「明治の精神」を鍵語として——

1 はじめに

『こころ』論争というべきものが八十年代にあった。石原千秋氏^①や小森陽一氏^②によって、「私」は先生の死後、お嬢さんと共に生きている、という論が提示されたのが発端である。田中実氏の論^③もそれと同一と見なされた。しかし決定的に異なっていたのは、田中氏の論では「私」の手記の基調音となっているのは尊敬であり、観念の牢獄にとらわれた先生を救うために一旦批判したということであった。そのことはしかし、先生の遺書に対する、私の手記による相対化という点で、石原氏や小森氏と同一の平面に置かれてしまった。また、実践論の見地からは『こころ』が授業に不向きとの見解もある^④。

現在の時点からこれらの論争を見えるならば、この作品を二つ

教室で読まれる『こころ』

篠 原 武 志

の対立する手記によるものと見なすか否かという根本的な問題が働いていたと考えられる。石原氏や小森氏は意図的にテクストの文脈を粉砕し、「還元不可能な複数性」^⑥に読者を誘おうという意識があったと見るべきであろうし、授業に不向きと断じる考えは「読みのアナキー」に飲み込まれている。一方、田中氏は先生の遺書が、「私」の編集作業によって「私」の手記に取り込まれている、とす

る。手記全体の語り手が「私」である以上、遺書をその中に取り込んでいるのも当然「私」と見るべきであり、その点で田中氏の意見の方が正鵠を射ていると思われる。ただ、疑問が残らないわけでもない。「私」が批判したのは、先生の観念の牢獄にとらわれた部分であるという点である。これはわかりやすいが、しかしそのように手記の中に記されない以上、どのようにすればそれが浮かび上がって

くるのか、ということである。以下、生徒の意見や授業の様子を記すと共にその事を考察していきたい。同時にこの作品の教材価値を考えたい。先走って言えば、「明治の精神」という鍵語を支点にすることによって、生徒にも、「私」が先生を批判的に継承しようとしている読みがベクトルとして教室内で立ち上げられるのではないか。と同時にポスト明治を志向する生徒たちの一助となるのではないか。

2 私を読み

語り手「私」が語られている「私」も含めて、過去を相対化しているのは上、中の手記からも見やすい。小森陽一氏も注目する部分に以下の部分がある。^⑦

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて云った。私は「そうですね」と答えた。然し私の心には何の同情も起こらなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅いものの様に考えていた。(上・八)

この記述から現在の語り手「私」には子供がいる。そしてそれが「ただ蒼蠅いもの」とは考えていない。父の今際の際に先生を選んだ「私」は故郷を喪失した人間、生活者として生きているが、その今を不幸な事態とは見ていない。そのような「私」が「先生」に對

する、そして自分の若き日に対するオマージュとして書いているのがこの手記であろう。そしてこの手記はやはり公開を目的として書かれたのであろう。「世間をはばかり遠慮というよりも」(上・一)とあるからである。問題はそのような先生のどの部分を称揚し、先生のどの部分を批判したのかということである。

この手記の公開が、末尾の次のような先生の言葉を裏切っているからである。

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積りです。然し妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何も知らせたくないのです。妻が己の過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存して置いて置きたいのが私の唯一の希望なのです。私から、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまつて置いて下さい。(下・五十六)

そして編集された遺書(例えばKの遺書がそうであったように簡単にでも世話になった札や簡単な挨拶が記されているはずである)をここで裁き切り、読者に印象づけているのは、語り手「私」である。つまり、「私」は先生の「妻が己の過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存して置いて置きたい」という考え方を批判したと云うべきであろう。

さて、それは「明治の精神」とどう関わるのであろうか。木村功氏はKの象形がけつして単純なフィクションではなく、日清戦争後にあつた倫理的宗教的雰囲気によつてゐることを述べているが、それはKのみに限られたものではなく、先生にもあつたのであろう。そうした禁欲的な倫理観が武士道的な精神とも結びつき生きていた一方で、個人主義的な觀念も発達したのが明治という時代であつただろう。先生もそのような時代に生きたのであり、明治とはある意味で觀念の時代であつた。先生はそのような時代に殉じることをもつて、「明治の精神に殉じる」(下・五十六)としたのである。先生はいわば、ポストモダンの時代を見据えつつモダンの時代に止まることを選択したのであつた。

房州旅行で「精神的に向上心のないものはばかだ」(下・三十)と言われた先生は、「お嬢さん」のことをKに告白できないことについて次のように言っている。

私にそれが出来なかつたのは学問の交際が基調を構成している二人の親しみに、自から一種の惰性があつたため、思い切つてそれを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという事をここに自白します。気取り過ぎたといつても、虚栄心が祟つたといつても同じですが、私のいう気取るとか虚栄心とかいう意味は普通のとは少し違います(下・三十一)。

ここでいう「気取る」や「虚栄心」の意味は世間全般に対するものではないだろう。Kという形而上的・觀念的な考え方をもつた人物と同じく先生も觀念的な人物だったのであろう。形而上的・觀念的な考え方の人物であるKに対して同じく形而上的・觀念的な姿勢で対抗しようとしているのである。先生もKも他者に対して向き合うあり方は、他者を向いているようでありながら互いにそうであるように觀念的で、自己化されたものとなつてしまふ。真面目に向き合おうとすればするほどそうなるのである。

しかし、そうした先生の考えは一方で女性を置き去りにしていくものである。先生は若き日に「お嬢さん」の笑いを技巧(下・三十四)によるものではないかと考えているが、一人の健康な女性である「お嬢さん」はKにも先生にもそのコケツトリをもつて接していたに過ぎない。それを技巧と呼ぶとすれば、全ての女性は技巧家である。

したがつて、「私」が批判しようとしたのは先生の「明治の精神」そのものであるともいえる。「私」は先生の遺書を読みつつ、先生のアイデンティティとしての「明治の精神」を公表する(それは他者に認められて始めてアイデンティティとなる。)と同時にそのアイデンティティたる「明治の精神」を批判するのである。

「私」は先生を批判的に継承する。それこそが「明治の精神」と

いう百パーセントの愛情、形而上的世界に殉じて死んだ先生をポスト明治に甦らせる道であった。と同時に「私」はかつての「私」も批判する。

先生は孤独でもあった。「ことによると貴方も淋しい人間じゃないですか。」(上・七)「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」(上・十四)。これに対して先生と交際していた頃の「私」は「私はちつとも淋しくありません」(上・七)と答えている。そうした「私」が淋しさを意識したのは大学卒業後、病の父の元に戻っている時であった。中「両親と私」にはしばしば「淋しい」という言葉が用いられる。

(蟬の声を) 聞きながら、時に悲しい思いを胸に抱いた(中・四)。

(先生はじめ多くの人に手紙を書いて) ただ私は淋しかった(中・四)。

(明治天皇の崩御の事で先生に手紙を書こうとしてやめて) 私は淋しかった(中・五)。

ここでいう「淋し」さはいうまでもなく先生と離れている淋しさを中心になっている。しかし「私」が先生以外には誰とも(当時、現代より遙かに重要な意味をもつ「家」の人間は勿論) ころころを通

じ合わせることができない認識を持つのであった。

そうであるからこそ、「私」は最終的に父を捨て「先生」を選ぶのだが、私が「中」において言いたかったことはそれだけではない。「私」もまた、かつて両親がこだわった「地位」(中・八)(生活)より、先生の提示する形而上の道を重視する人間であった。そのことは「私」にとってそう選ぶ他なかったこととは言え、生活者として現在を生きる「私」には、この手記を書いている今、両親の提示したことの意味が分かりつつあるのであろう。そして何よりもそこには捨て去らねばならなかった両親への哀惜がある。「私」は先生を継承し乗り越えると同時に、過去の両親の提示した道を歩けなかった「私」を継承し、乗り越えるのである。

3 生徒の考えた先生

本校は男子校(一学年 四五人×五クラス 文理混合二クラス 理系三クラス)である。世間では進学校という見方をされているが、必ずしも国語に関してはできる生徒ばかりではない。ただ稿者が同じ学年を持ち上がって五年目という強みはある。さて、本校生は以前の学年で実践したときも初読感想で「明治の精神」に興味を示す生徒が多かった。それならば、いっそそこを支点にしてみようというのが本実践である。

さて先生が形而上的世界を生きる存在であるとき、生徒は先生をどう捉えたのであろうか。以下、夏休みに全文通読の宿題を出し、夏休み明けに書かせた生徒の初読時の感想である。

① もの静かな人で自身のせいでKを自殺においやったという負い目を感じている人物。交友が狭く寂しい人間。妻を傷つけないため、そして何より自分が傷つけないために過去を私以外には封印した自分を守ることが第一の人物。(傍線篠原、以下同じ)

② 子供の頃に両親と死に別れ叔父にだまされたことで他人に對してまず不信任を抱くようになった。Kの自殺や結婚を通じて彼は自分の心の成長を自覚していたかもしれないが、やっぱり最後までどうしようもなく弱い人物だった。思い切つて妻に全てを打ち明けるだけの強さがあればこの小説は幸福な結末を迎えていたように思う。

①の生徒と②の生徒に共通するのは「お嬢さん」を傷つけまいとする気持ちの故に先生が自殺に踏み切ったことである。そのことは百パーセントの愛情を先生の態度から感じ取っているということであろう。それは現実にはあり得ない形而上的愛情である。

さて、こうした初読感想を書かせた後、『こころ』の下の部分について授業をし(九時間)、その後全体について授業をした(四時

間)。

T 「先生ってどんな人やろね」

S 1 「②の意見でもあったけど、中一るとき『おにたのほうし』ってやったやん。なんかあれ思い出した。あのときもおにたは弱虫だっていう意見あったし」

T 「なるほど、先生が奥さんに事実を言えなかったっていうのはその通り。でもそれはおにたみたいに自分を隠してたのかな?」

S 2 「隠してたといえはそうなんやろけど、先生がもし事実を言ったら妻は涙ながらに許してくれるだろうって言ってるやん。それ考えたら『弱い』っていうのはどうなんやろ。」

S 3 「先生は奥さんの記憶を純白にとどめておきたいって言っている。それを考えたら、奥さん思いでそうなった」

T 「そういう純白の記憶、純白の愛情でもいいんやけど、現実にある」

S 4 「学年演劇でそんななかつたつけ」

S 5 「あつたね、セカチューみたいなやつね」

S 6 「でも、そういうのってお話しだから成り立つわけで、実際に女の子と付き合ったらそうはいかない?」

T 「S 6は経験があるのかな? それはいいとして、そういう

百パーセントの恋愛なんて、やっぱりリアリズムでは成立しないのよ。」

S7 「そういう意味では、先生は奥さんを自分の理想に、自分の手の内に死んでもとどめておこうとしているっていうことになる」

T 「今のS7の指摘は重要やね。先生っていうのは結局、自分の中で理念の世界を作っちゃう人物だったっていうことね」

S8 「それって女性蔑視っていうか、女性差別じゃないの？」

T 「そうともいえる。ある意味でその女性の本当の声を聞かないわけでもそれも時代の風潮と無関係ではないやろうな」

先生が形而上の世界を生きる存在とはいえ、そのことはそうした言葉では十分生徒には理解されない。生徒の生活実感の中で、生徒の生活経験の中からベクトルを探し出し理解させることが重要であろう。

4 生徒の掴んだK

さて、生徒はKについてどのように考えていたのであろうか。同じく、Kについても初読時に書かせてみた。

③ 「K」は作品で語られるとおり仏教の信仰が強く、また強情で無口であった。作品で記される部分は無いが、「K」が

「先生」に恋をわざわざ打ち明けたり、「静」と仲良く話す場面があるところから鑑みて、平生人とあまり関わりはないものの、親しくなった人とは厚い信頼を置くように思える。これは「K」が真面目な性格も持ち合わせていることと関係があると思う。その強情である反面の真面目さ、そして信頼が裏切られることがまるで予測できないほどの強さであることから、「K」は強情故にもろく崩れやすい人物として描かれている。

これらに基づいて授業をしていった。

T 「今日はKの人物像なんやけど、Kってどんな人やろう？」

S1 「③が言っているけど、真面目だと思う」

S2 「でも愛にはもろく崩れやすいとも言っている」

T 「それはどっちも正解やね。Kが『道』とか『精進』っていう言葉をよく使うように、すごく真面目なのは間違いない。その真面目さから見るとき、恋そのものが抑圧するべきものやっただけやけど、ヒトである以上、それはでけへんかったわけやな」

S3 「精神的に向上心のないものはばかだ」

T 「つまり、Kは自分を精神的向上心のある人のままにしておきたかった。しかし、恋をした自分はそうではない。」

S 4 「先生、『道』って、前の授業の時もそんなにきっちり言ってくれへんかったけど、具体的にはどういうことになるの？」

T 「この時代って明治になってだいぶ経ってるやろ。せやから例えばキリスト教の影響なんかもあつたわけね。歴史で習ったよねピューリタン」

S 4 「清教徒革命。アメリカに移民した人の中に多いんやんな」

T 「そう。その清教徒は別に財産の私とか恋とかを禁じただけではなかったんやけど、Kはさらにそれを推し進めた倫理観念を持っていたっていうことになる」

S 5 「それが『道』？」

T 「もう少しあると思う。『明治の精神』もからんでくるから、少し話そか」

S 6 「待ってました」

T 「例えばKの父親ってほとんど出てこないけど、先生から何て言われていたか抜き出してみて」

S 7 「坊さんとか裕福とかでなくって？ これかな？ 『彼の父は

云うまでもなく僧侶でした。けれども義理堅い点に於て、寧ろ武士に似たところがありませんかと疑われます（下・二十

一）』」

T 「そこね。^⑩倫理的であることが武士道と結びついていたのが、

先生とかKの生きたより前の時代。日本史で新渡戸稲造の『武士道』とか習ったよね。キリスト教精神と武士道が一緒やっていう…。でも先生もKもその時代の影響を受けて育った。でも次の時代は…？」

S 8 「大正時代？ 大正デモクラシーとかあった。個人の権利とかが叫ばれた時代？」

T 「そういう風に考えるとわかりやすい。だから、Kにとって『道』っていうのはすごく武士道的な倫理観念に基づいた世界やつたし、昔の武士が名誉を大事にしたように、何よりも大事なもののやつた訳や。それは先生も一緒やな。先生はしばしば『自尊心』を口にするけど、それもその倫理観念がある。そういう武士道的倫理観——それが観念の世界に通じちゃうんやけど——と個人主義の両方に引き裂かれた時代の精神、それが『明治の精神』やつたわけや。」

5 お嬢さんの笑い

研究史の上ではお嬢さんの笑いについて問題になったことがあるが、生徒達はどうのように受け取ったのであろうか。やはり初読時に書かせた。

④ 「静」はよく笑う人物でかつては「先生」と「K」のどち

らにも好意を寄せていたと思われる。母が死んでからは信用できる人が「先生」だけになったのでより「先生」のことを大切に思うようになった。「先生」の死の間際でもその想いは変わらなかったと思われる。

④の生徒は先生とKのどちらにも好意を抱いていたとする。さて、これらの論を読みながら生徒はどう考えたのであろうか。

T 「お嬢さんって何人かの生徒も書いていたようによく笑う存在だと思うんだけど、ここからどういう事が読み取れる？」

S 1 「先生が『技巧』って言っているよね。先生の立場からしたらそれも『技巧』に見えたんじゃない？」

T 「S 1、もうちょっと説明して」

S 2 「つまりお嬢さんは④が言っているように、先生にもKにも好意を抱いていた。でもそうと違うように見えなくてもいい。先生の方からみたらKに好意を抱いているように見える」

T 「そうやね。今まで何回もいつてきたけど、真実は一つではない。見る立場を変えれば色んな風に見える」

S 3 「つまりお嬢さんの笑いは自然のものだって言うこと？」

T 「そうやね。お嬢さんは若い女性として普通の人だということ。それなりに男から見たら色気もある訳や。そこ笑わない。でも、お嬢さんを愛している立場から見たら？ 今笑ったS 4

答えて」

S 4 「嫉妬に苦しむことになる」

T 「そう、先生は愛を理想化しているから、特にそうやな。先生は愛について自分のことをどう言っている？ 下の三十四から抜き出してみて」

S 6 「私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時に最も迂遠な愛の実家だったのです」

T 「そこね。先生は前にも言ったようにお嬢さんという存在ばかりでなく愛そのものを自分のうちに閉じこめちゃう。愛を『技巧』化するなんて許せへんかったわけやな」

6 おわりに 語り手としての「私」を考える

語り手の「私」については、次のような意見が出された。

⑤ 先生と知り合った頃の「私」は先生という人間に対する好奇心がとても強く、その好奇心がしだいに先生の表面的なものから、内面へと移っていった。先生の遺書を受けとったことで、先生に対し重い責任が生じたが、それを公表したことは、先生の人生への否定的な主張が感じられる。

S 1 「⑥は『私』に『先生の人生への否定的な感じ』があるっていうてるけど、僕はそうは思われへんのやけど。」

S2 「全体としては尊敬ちゃうの。『これは世間を憚る遠慮とい

うよりも、その方が私にとって自然だからである』って上の一
で言っている」

T 「まとめると、この手記の基調となっているのは尊敬なんや

な。でも⑤のいうように、お嬢さんに知らせないでくれという
禁忌を破って書いているわけからそこには批判的なものもある
やろう。問題は『私』が先生のどの部分を批判しどの部分を受
け継ごうとしたか、っていうところにあるな」

こうした議論の上で最終の論を書かせた。

⑥ 「私」の手記は先生への、そして明治という時代に対して
の挑戦状だと思う。明治なって三十余年、日本は大きく変わ
らざるを得なかった。しかし、その激動の時代でも日本人の

心は変わらなかった。武士道、家長制もその一つだ。そして
やはり消えない男尊女卑の風潮。先生もその影響を受けて育
った一人だ。女性と交わりを持たず、学に励んだ若き日の先
生やKの存在は当時の日本人の姿そのものと言っても過言で
はないだろう。恋愛という文化さえも根付いていない時代。

この時代に先生が静に対して抱く感情があつたのではないか
自分の汚い過去を知られたくない。そして何よりそれが自分
を原因として起きたことを知られたくない。自分のように欲

教室で読まれる『こころ』

に手を染めたり人を傷つけたり、傷つけられもせず純白のま
ま生きてほしい。そういう感情があつたからこそ先生は静に
本当のことを告げなかったのだ。どんな人間も抱えている、
抱えていて当然の汚い部分をさらけ出そうとはしなかったの
だ。私はこの先生の行動に当時の思想が絡んでいるのは明ら
かだと思う。先生の自分の妻に対して持つ感情は最早人間同
士の感情ではない。大切な衣類や宝石にしみやきずがつか
ないようにクローゼットの奥底にしまいこむ所有欲と同意では
ないだろうか。先生は女性をよくわからない。唯一自分が愛
したそして愛された女性を一個の人間としてではなく、自分
の思うカギカッコつきの「愛する」女性一般として大切にし
ていたのではないだろうか。

しかし時代は変わる。「明治」は死んだのだ。故郷を失い
家族をもつた「私」は立場を変え、先生をより理解すると同
時に批判的な立場を取っている。女性というものについて、
愛について「先生」の目線と相違することがわかる。人は汚
れていくものだ。しかし汚れさえも愛し合えるのではないか
そう思った「私」は「先生」を受け継ぎながら批判し、真つ
向から立ち向かう。それがこの手記である。

⑥の生徒は「純白の」愛の裏側にある女性を所有物のように扱っ

考え方こそ「明治の精神」であり、私はそれを批判しているという。¹² 以上のように生徒は文脈を読んだ。そこには、なぜ「私」がこの手記を書いたかという他者性がほの見えている。¹³ とすれば「私」がそうであるだろうように、生徒も先生とは違う道を選ぶべきであろう。先生の「純白」の愛とは異なる世界を、たとえ罪を知ることと愛する人のアイデンティティが変容しようとも現実を生きることを、「明治の精神」とは異なる世界を、ポスト明治を生成し生きるべきであろう。生徒をそうした世界に誘う開かれた通路、それが『こころ』という作品の価値であろう。

注

- ① 石原千秋「『こころ』のオイディプス——反転する語り——」『成城国文学』一九八五年三月。
- ② 小森陽一「『心』における反転する〈手記〉——空白と意味の生成——」『成城国文学』一九八五年三月。
- ③ 田中実「『こころ』という架け橋」『小説の力——新しい作品論のために』大修館書店、一九九六年二月、九二頁。田中氏は「より正確に言う」と『私』のメッセージのなかに、『私』自身の手記とその『私』によって編集された書簡（遺書）とがあって、その二つが『私』の編集意図によつて貫かれていると言った方がよい」と端的に『こころ』の構造を指摘しておられる。
- ④ 例えば深谷純一氏は次のように記しておられる。
たしかに時代を超えた普遍的な人間の真実を描いた『こころ』は

名作かも知れない。しかし今度教材として扱ってみてわかったことは、生徒たちにとってこの『こころ』の世界は、何かウソツぽさ、別世界の出来事というようなものを感じさせるものであったということであった。『こころ』の作品としての見事さを認めつつも、今日的教材としての価値にいささか疑問を感じだしているというのが正直な気持ちである。（深谷純一「授業実践」『こころ』〈夏目漱石〉教師の読みと生徒の読みのズレ」国語研究サークル土曜日の会編『揺り起こす文学教育——土曜日の夕——』法律文化社、一九八七年七月）

注①・②に同じ。

⑤ ロラン・バルト「作品からテキストへ」『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房、一九七九年一月、九七頁。

⑦ 注②に同じ。ただし小森氏はここでの奥さんの「貫いっ子じゃ、ねえあなた」という「私」に対する呼びかけから私と奥さんの関係を読み取ろうとしている。これには牽強付会としかいう他ない。

⑧ 木村功「『こころ』論——先生・Kの形象に関する一考察——」『国語と国文学』一九九一年七月。

⑨ 「明治の精神」については、例えば李美正氏が思想史を援用しながら先生の「明治の精神」が「個人の個性や主体性を重視する」ものであったと説く（李美正「夏目漱石の『心』論——三人の死を通してみた『明治の精神』——」『広島大学学院教育学研究紀要第二部』二〇〇二年三月）。しかし、それだけでは先生の自殺の謎は解けない。封建主義と個人主義という二つの時代に挟まれたダブルバインド状態を想定しないといけないだろう。

⑩ 仲秀和氏は「先生はKの父のことを『武士に似た所があ』」と語っていた。Kも先生もそのような気性を受け継いだ世代ではなかったのか」

と述べている。(仲秀和『こころ』研究史』和泉書院、二〇〇七年三月、一五〇頁)

- ⑪ 例えば、秋山公男氏は『三四郎』の美禰子が三四郎をだしに使って野々宮を牽制したのと同様に、Kを利用して先生に嫉妬を起こさせるべく企まれた『技巧』とみるより他にない」としている(秋山公男『こころ』の死と倫理——我執との相関——『国語と国文学』一九八〇年七月)。

- ⑫ 「明治の精神」という言葉を用いない論も多く見受けられた。例えば次のようなものである。

先生は何故自殺したのかというと、それはKとの出来事があったからだ、それでは先生の自殺にはどんな意味があったのだろうか。先生はKとの出来事を経てKへの罪悪感、人間不信という自分を含む人間への絶望と妻への愛という二つの板挟みにされ、生きること死ぬこともできない状態に陥ってしまう。その中で先生が行ってきたのは徹底的な自己否定だった。そして、明治天皇が崩御した際、殉死という大義の下に自殺を執行してしまう。Kとの出来事を妻に打ち明けて、自分の存在の証を何も残さずに消える。という完全な自己否定の手段をとってしまうのである。しかし、その一方で、先生は「私」に遺書で全てを打ち明けている。それは、先生が自身の自己否定に反して、心の奥底で自分の証を残したいと思っていた、ということではないか、と思う。だからもし「私」がこの手記を書き、公表したことが先生への批判としてあるというならば、それは先生が行ってきた自己否定への批判なのではないか。「私」は先生を尊敬していた。それは先生が人間というものをよく知る人間であり、人間の本質を理解する人物だ、ということを感じとっていたからである。だからこそ、「私」は先生が行った自己否定を批判し、

教室で読まれる『こころ』

先生という存在を肯定しようとしたのではないだろうか。手記の公表は先生の中にある、妻への愛と矛盾してしまうがためにどうすることもできなかった自分自身の証を残すという行いを先生の自己否定に反してでもかわりにかなえてやるための行動ではなかったのかと思う。

ここでも先生を救うための批判というバクトルは教室の中で共有されている。

- ⑬ この授業の後で、ある生徒が私の元にきて「先生は自分を、あるいは自分が一体化する明治の精神を批判してもらいたかったのではないか。その役目を『私』に託したのではないか」といつていた。肯ける考えだと思う。現在のところこれを教室での読みのバクトルの最先端としておきたい。先生も自らの弱点を見つめつつ(それがアイデンティティでもあるが)、自分では達しえなかった次代への精神、ポスト明治への精神を「私」に、そして読者に期待したのではなかったのだろうか。そしてその道(先生とKのようにではなく、「私」が先生と対したように「真面目に」他者と対峙するあり方)が期待されている読者こそ生徒たちであらう。

*授業で使用したもの、本文で引用したのも新潮文庫『こころ』に拠った。また、本稿は拙稿「教室のための『こころ』読解——『私』は『明治の精神』を批判する——」(『日本文学』二〇一四年六月)と一部重なる部分がある。また、本稿は二〇一四年度春季同志社大学国文学会研究発表会(二〇一四・六・一五 於同志社大学堂町キャンパス寒梅館二〇三号室)での発表を元になっている。